

誇りと自信と感謝の気持ちを

理学部長 西川 恭治

理学部卒業生、並びに理学研究科修了生の皆さん、卒業・修了おめでとう。

君達にとって、この最後の一年間は本当に大変な年だった。身近なところで理学部の移転があった。卒業研究・修了研究のために一番大切な時に移転が行われ、君達は、研究を中断されたり、移転の作業の手伝いをしたり、下宿の引っ越しや慣れない新キャンパスでの生活をしながらの卒業・修了研究であった。そして、それを立派に成し遂げた君達に、私は心から賛美の言葉を贈りたい。

と同時に、君達は、君達の先輩や後輩にはできない貴重な経験をした訳だから、そのことに誇りと自信と、また少しぐらひは感謝の気持ちを持って欲しいと思う（そんなしらししい、苦労させられただけなのに」という声が聞こえるような気もするが）。私がいま、こんなことを書くのは、君達をこれから待ち受けている社会で、君達は、きつとこの一年間の苦労に勝る苦労を経験するに違いないと思うからだ。挫折と絶望感、そしていわゆる「骨折り損のくたびれ儲け」を何度か経験することだろう。そんなとき、愚痴をこぼしてもどうにもならない、逆にこの苦しみを逆手にとって、自らを鍛え、新しい前進への希望を自力で切り開く機会にして行こう、そしてそういう気持ちの転換の機会を与えてもらったことに感謝する気持ちになることがあるだろうと思う。そのとき、きつとこの一年間をしつかり乗り切つて来た経験が活かされるに違いないと思うのである。

思いつくことは

医学部長 原田 康夫

卒業生の皆様、御卒業おめでとうございます。私も医学部を卒業して早や三十五年も経ってしまいました。はじめはこの長い大学に在るとは思っていませんでした。振り返つてこの長い大学生生活を通して感じたことは、何か不思議だと思つたり、興味がわいたことを目標として、ずっと思い続けることが何よりも大切ではないかということです。研究にはお金がいるというのは誰でも知っています。日本の大学の校費や研究費は私達が若かった時と今とはそれ程大きく増額されてはいません。しかしながら、その乏しい中から続けてきた研究でも何がしかの成果はあがつているもので、中には世界の研究をリードするものもある様に思えるのです。どうやら研究でも仕事でも一つのことを継続してやつて行き思いつづければお金の方はいつかついてくるもののようなのです。これから皆様の入つて行く医療の世界には多くの面白い課題がころがっており、これらの学問、研究、医療業務の中にも流行もあります。何事も流行となつた分野の仕事は一見華やかに見えますが、それにばかり眼を向けていては常に流行の後を追うようなものです。地味な仕事や研究課題であってもたゆまず続けて行くうちに必ず流行を呼ぶものとなることもあるのです。皆さんはこれから、医療の世界の次の世紀を背負う人達なのです。如何なる仕事にたずさわつても、進歩の激しい世界を歩まねばなりません。そこで流行にとらわれることなく、自分のやりたいと思つていることを思いつづけ、地道に追求して行くことが、自らの道を開き、自分の仕事に光がさし、流行さえ生むことができるものと思つています。皆さんの前途に幸多きことを祈つています。